ヤンソンス指揮のマーラー「第7交響曲」を聴くかどうか迷っている方のために！

マーラーの「交響曲第７番《夜の歌》」は、不思議な曲だ。

それゆえに、いちばん面白い曲だ、と言えるかもしれない。

第１楽章は、冒頭からしてミステリアスで、ものものしい。序奏主題を最初に提示するのはなんとテノール・ホルン。珍しい音色だ（２分ほど経つとこの主題は、1961年に日本でもヒットした「霧の中のジョニー」の「Johnny,remember me」の個所のフシと同じになる）。

それはともかく、この曲は、フィナーレを除く最初の４つの楽章に、まさに「夜の歌」という言葉にふさわしい神秘的な雰囲気が満ちている。もともと「夜の歌」という副題は、第２楽章と第４楽章に「夜曲」（Nachtmusik）と副題が付けられているところから出たものだ。だが、その２つの楽章にも、最弱音のさなかに突然ティンパニが最強奏で轟くといったような、マーラー特有の奔放な曲想が入り交じる。しかも第４楽章にはギターとマンドリンまで入って来て、セレナード的な雰囲気までつくり出すのである。

そして、それら「夜曲」の間に挟まる第３楽章には、マーラーは「影のように」という指定をつけた。そこには奇抜な奏法による怪奇な表情が次々に現われ、マーラーの前衛的感覚をうかがわせて魅力的だ。

が、最も不思議なのは、フィナーレ――第５楽章である。それまでの４つの楽章におけるミステリアスな雰囲気などどこへやら、とつぜん暴発的な躁状態といった音楽と化してしまうのだ。冒頭のティンパニのソロからして、異様な興奮状態を感じさせるのではないか。昔から、マーラーの研究家や愛好家を悩ませてきたのはここだ。「なぜ、いきなりこうなるのか」というわけである。それはマーラーの皮肉か？あるいは、彼の中にある極端に対照的な性格が、またもやここでも顕れたと解釈すべきなのか？

さまざまな考え方が可能だが、その謎解きの一助となるのは、指揮者の解釈だ。今回はそれらを、マリス・ヤンソンスの円熟の指揮で聴いてみたい。全曲を、矛盾を厭わずばらばらのままで流すか、または、明暗のコントラストとして論理的に描き出すか、あるいは、光と影の表裏一体というイメージで構築するか――。

なにしろ前回の来日で、同じマーラーの「第９交響曲」の第４楽章の最後を、筆舌に尽くし難いほど見事な安息感で結んでみせたヤンソンスだ。今度の「７番」も、並みの解釈には収まらぬはずである。

東条碩夫〔音楽評論〕

Jansons©PMeisel（BRSO）

バイエルン放送交響楽団 指揮：マリス・ヤンソンス

2018年11月22日（木）19:00（18:00開場） 東京芸術劇場 コンサートホール

歴史的名演の予感！ ◆マーラー：交響曲 第7番 ホ短調「夜の歌」

S¥34,000　A¥28,000　B¥22,000　C売切　D売切

《お申込》ジャパン・アーツぴあ 03-5774-3040

www.japanarts.co.jp　ジャパン・アーツ　検索

東京芸術劇場ボックスオフィス（0570）010-296
チケットぴあ t.pia.jp 0570-02-9999（Pコード:110-789）
イープラス eplus.jp　ローソンチケット 0570-000-407（Lコード:31379）

主催：ジャパン・アーツ　提携：公益財団法人東京都歴史文化財団（東京芸術劇場）　後援：ドイツ連邦共和国大使館

富士電機スーパーコンサート

マリス・ヤンソンス指揮／バイエルン放送交響楽団

11月23日（金・祝） 兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール

◆マーラー：交響曲 第7番 ホ短調「夜の歌」

（お問合せ）芸術文化センターチケットオフィス 0798-68-0255